

よせぎ  
平成 29 及び 30 年度 小田原森里川海インキュベーション事業“寄気”申請書

指導教員 情報	大学名称	東京工業大学
	学部・学科	生命理工学院
	ふりがな 氏名	たちばな かずのり 立花 和則
	大学所在	神奈川県横浜市緑区長津田町4259
	研究分野	海洋生物学、遺伝学
①取組みたい調査研究テーマ		小田原市の山・里・川と「海」を結びつけるための海洋リテラシー向上
②調査研究内容		
<p>現在、小田原市では、『自然とのふれあいの機会の喪失といった問題が生じており、これに伴い、市民の環境に対する意識も相対的に低下している。』ということが、本事業の解決すべき課題として趣旨に取り上げられている。特に、市民の海に関する関心が低いことが問題である。そこで、市民が山・里・川につながる海の自然に親しみ、海の環境保全にも関心を持つようになるために、まず、海に対する関心が低い原因を調査する必要がある。そのため、平成 28 年度の本事業において、早川から真鶴に至る小田原市の海岸の予備調査を行った。その結果、早川から真鶴に至る小田原市の海岸がほとんど岩場で、遊歩道のようなものもなく、市民が利用しにくいことと、西湘バイパスが障害になってアクセスが悪いこと、さらに、この周囲の景観も西湘バイパスの橋脚部、テラポットと岩場からなる殺伐したものであることが考えられる。そこで短期的には、まず市民に利用しやすい早川以東の海岸の活用法を考え、ついで、早川以西の長期的利用法を開発し、小田原市民が「海」に関心をもって、海の環境保全、レジャー、防災などに参加できるような体制を構築するための基礎となるデータを得るための調査を行う。</p>		
③提案テーマにより、どのような経済効果が想定されるか		
<p>小田原市民が「海」に関心をもって、海のレジャーを楽しむことが増えると、海のレジャーに使用する道具、外食、などの消費につながり、経済効果が期待できる。現状では、市民の「海」にたいする関心は低く、市民の海(海岸)の利用は、ほぼ釣りのみという状況である。釣りについては、市外からの利用者も多く、安全で環境に負荷の少ない釣りの利用の拡大により、経済効果も考えられる。しかし、釣りのみでは経済効果が薄く、大きな成長も期待しがたい。そこで、他の海の利用を考える必要がある。たとえば、シーカヤックなどは海に親しみつつ、自然観察することに適しており、海洋リテラシー向上のために良い手段であると考えられる。海洋リテラシー向上により、環境保全、防災などに意識が高まることで、長期的な経済的損失をすくなくする効果も期待できる。</p>		
④調査・研究の方法		
<p>小田原市民の海洋リテラシー向上のためには、まず、市民が「海」に親しみ、関心をもつようになることが必要である。そのため、海岸を徒歩でゆつくりと調査し、市民の利用状況、景観、周辺の利用できる店や駐車場などの状況を明らかにする。また、沿岸の生物の生息状況調査は、環境保全のもととなるデータとして重要で、まずは、徒歩の調査、続いて沿岸は船を用いて、目視、水中カメラを用いた調査、またダイビングによる調査を想定している。海岸利用の現状を把握するためには、市民を対象とした海の利用に関するアンケート調査も必要となるかもしれない。</p>		
⑤調査・研究のスケジュール		
<p><b>平成 29 年度</b></p> <p>まず、徒歩で酒匂川と早川の河口域、漁港の周辺を綿密に調査し、海藻のありそうなところは船、そして水中の様子を、水中カメラやダイビングによってより詳細な調査を行う。</p> <p><b>平成 30 年度</b></p> <p>平成 29 年度に小田原市の海岸の全体の調査を行い、30 年度にはその結果をもとに重点的に調査すべきポイントを定め、プランクトンネットなどを用いてサンプリングして生物多様性などのより詳しい調査を行う。</p>		

⑥おだわら環境志民ネットワークとどのように関わるのか

小田原市民ネットワークの意見交換会に参加して、本事業の森里川海の中の「海」の部分を担当する石橋ダイビングセンターの滝田さんと東京大学生産技術研究所平塚総合海洋実験所の石戸谷さんとお会いし、さらに滝田さんとは予備調査でお話をうかがった。本事業は非常にしっかりした森里川のメンバー(団体)をもつが、海の部分を担当ところが不足しており、申請者はこの海の部分の助けになりたいと思っている。また、申請者の研究室の学生が将来的におだわら環境志民ネットワークと連携して環境を担っていくようになってほしい。

⑦その他の関係者として連携が想定される団体・企業等

海洋リテラシーの向上のもとになる、海岸環境の調査とその結果の分析については、国立科学博物館、東京大学(三崎臨海実験所)、横浜国立大学(大学院環境情報研究院附属臨海環境センター)などのアカデミックな研究機関との連携が想定される。また、海洋リテラシーの向上を経済的な効果につなげるために、釣りに関しては小田原市内の釣具店、シーカヤックについてはスポーツショップなどとの連携が予想される。

⑧大学として小田原市との今後の連携についての提案

本学の生物系の学部(生命理工学部)には環境問題に関心の高い学生が一定数存在するが、そのような学生の中から熱心に希望するものをインターンシップにより、小田原市に派遣し、特に環境行政の現場で、実際にどのような仕事が行なわれているかを体験させることができると、将来、彼らが環境の保全を担当する人材として社会に貢献できるようになる可能性がある。また、小田原市立の小中学校の生徒について、自然観察などの指導や大学の研究室での職場体験などを行うことができる。また、教員を大学に招き自然観察や生物学の実験の体験をしてもらい、それを教室での授業に生かして、生徒の指導に役立ててもらうことができる。